



生産システム

青山 雅之*

皆さんは生産システムと聞くと何を思い浮かべますか？革新的な自動化ラインであったり、工場全体をIT技術でコントロールしたFA工場であったり、仕入先や顧客とのモノと情報の流れまでも含めた有機的な結合システムなどいろいろなことがあるかと思います。実はどれも正解であり、明確な答えが無いことが生産システムなのです。

システムを辞書で調べると、制度、組織、体系、方法、方式…などと書かれています。言葉で定義することが難しいかも知れません。それに生産が付いた生産システムとなるとさらに厄介になります。生産だけに留まらず、開発のプロセスを含んだ別次元（時間軸）の概念も入るかも知れません。

今回は、私が今まで経験してきた“モノ作りの生産システム”についてお話します。

『生産システムは、全て特殊解である。』と考えています。

その理由は、当社では、自動車部品を多岐に渡って製造しています。精密機械加工部品から、回転機、樹脂成型品、電子製品、電子部品そしてそれらを組み合わせたシステム製品まで、ありとあらゆる加工法のデパート状態です。それらの加工法を組み合わせ、時には新加工法を開発して、さまざまなニーズや需要の異なるお客様向けの生産システムを考えに考え抜いて計画し、自前の専用機設計・製作部隊の力を活用して、差別化した設備による特殊解生産システムを構築していきます。

JIEP 会員皆さんのエレクトロニクス産業から見れば、「何で特殊な設備をしかも自前で作るのか？業界では標準化された汎用設備が安く手に入るのでは？」と不思議に思われるかも知れません。ここが当社のこだわりであり、一見無駄に思えますが、特殊解生産システムで、10年から20年生産し続けていけるだけの製品競争力を生み出す加工法と生産システムがあれば、結果的には高い競争力を維持できるからです。これは、エレクトロニクス産業界で能動電子部品の国際競争力が高いことにも繋がります。

現在、JPCAでは『ダントツ生産システム研究会』なるものが発足しました。これはプリント配線板業界において、日本でのモノ作り力の強化により、世界競争力向上を目指した取り組みです。日本が元気になるととても良い取り組みと思います。当社も微力ながら参画させて頂いております。

JIEP 会員皆さんへのメッセージですが、確かに独自加工、特殊加工、差別化加工法などを各種開発されておりますが、この成果を産業に結びつけるところが、現在の日本企業の国際競争力から厳しい状況にあるのではと危惧しています。この突破口は、その開発された加工法で生み出される製品競争力をダントツに高め、さらに独自生産システムを考案して、具現化していく知恵と取り組む勇気が、未来を切り開くと思っています。